

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K08125

研究課題名(和文)世界遺産を活用した観光地整備のあり方に関する研究

研究課題名(英文)A Study on the Development of Destinations Utilizing World Heritage Sites

研究代表者

伊藤 弘 (ITO, Hiromu)

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：60345189

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、世界遺産登録を契機に観光地化を進めた地域を対象に、観光の取組みと世界遺産の構成資産に見出された価値の関係を把握し、構成資産の価値を發揮させるために必要な、観光地開発の観点や手法について検討した。対象地は、平泉・白川郷・富岡製糸場・熊野古道・石見銀山であり、現地調査および文献調査により把握した。現在対象各地で取り組まれている観光は、「世界遺産」登録時に見出されたもしくは「世界遺産」という価値に基づいており、プログラム展開の可能性は低い。一方、地域との関係から見いだされた価値は、自然や町と関係を有しており、それらを観光の対象とすることで、豊かなプログラム展開の可能性が広がるといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、世界遺産を対象とした観光地整備は、特定の構成資産を中心に進められてきており、観光客の集中を引き起こしていた。また、世界遺産の「顕著な普遍的価値」を観光客が理解できない状況にもあったといえる。世界遺産は、本来地域との関係の中で価値が見出されてきたものであり、その価値を観光客が体験できるように観光地を開発し整備することで、時代の志向性に即した多様なプログラムを展開することが可能になるといえる。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the relationship between tourism and the values found in the World Heritage properties, and examined the perspectives and methods of destination development necessary to bring out the values of the properties. The objectives of this study are Hiraizumi, Shirakawa-go, Tomioka Silk Mill, Kumano Kodo, and Iwami Ginzan, which were identified through field and literature surveys. The tourism programs that are currently being implemented in the objectives are based on the value of "World Heritage" or were discovered at the time of "World Heritage" registration, and there is little potential for program development. On the other hand, the values found in relation to the region are related to the nature and the town, and by making them the object of tourism, the possibility of developing rich programs will expand.

研究分野：環境農学(含ランドスケープ科学)

キーワード：世界遺産 観光地 観光対象 平泉 富岡製糸場 白川郷 熊野古道 石見銀山

1. 研究開始当初の背景

世界遺産は周知のとおり「文化遺産及び自然遺産を人類全体のための世界の遺産として損傷、破壊等の脅威から保護し、保存することが重要であるとの観点から、国際的な協力及び援助の体制を確立すること(世界遺産条約)」を目的に、真実性や完全性を有し、各国にて保護体制が整っている物件が構成資産として登録されている。日本における登録件数は、文化遺産15件、自然遺産4件、暫定記載一覧物件に記載されている物件は文化遺産11件あり、今後も地方公共団体から文化遺産を中心に提案書が提出されることが予想される。世界遺産に登録されると、世界遺産を観光資源とする観光地の整備がなされるようになる。しかし、世界遺産の構成資産だけが観光資源として取り扱われることが多く見られる。例えば石見銀山が「がっかり観光地」と評されるのは、構成資産同士が離れてしまっている中で、特定の構成資産だけを観光資源としているため、その価値が伝わりづらいことと、そこで得られる観光体験には限りがあるためと考えられる。また、ガイドや案内板による解説も、言葉や図による情報提供が主であり、ここでも観光者が得られる観光体験には限りがある。観光者の行動パターンは域内を回遊するものであり、何回訪れても観光者が新たな体験を得るようになるためには、地域全体で構成資産の多様な価値を活かすような観光体験を促すための、観光資源の開発と観光地の整備を検討する必要がある。

本来日本の文化は、地形や土壌、気候およびそれに基づく植生等地域の環境条件に即して形成されたものであり、文化遺産も少なからずその環境条件に基づいて成立し、それに基づいて地域も形成されてきており、周辺の様々な要素や条件との関係から価値が生じたといえる。しかし、世界遺産という意味づけにより、特定の要素だけが構成資産として地域から独立して観光資源として取り扱われ、結果、その評価されるべき価値が伝わらないまま観光者が構成資産に集中し、構成資産が徒に劣化してしまうことが危惧されることである。したがって、世界遺産で登録される緩衝地帯も含めた地域全体の活用も期待されることである。一方、観光の分野においても観光とまちづくりを一体化させた「観光まちづくり」が取り込まれるようになっており、特定の点的な観光資源によらないエコミュージアム等面的に「見せる」地域づくりの機運が高まっているものの、その手法が確立されているとはいえない。

今まで世界遺産と観光の関係に関しては、観光客と地域住民の「まなざし」の差異をみたものや、観光による影響等が明らかになってきた。世界遺産を観光資源とした観光地整備に関しても、いかに構成資産に影響を与えないようにするか、といった観点からの記述が多く、いかに構成資産の有する価値を観光者に伝えるかといった観点からの記述はない。

世界遺産の構成資産と、それに関係する地域の諸要素を共に体験できるように一体的に観光資源とすることは、観光者が当該地域全体の歴史や文化を理解し、なぜそこに当該資産が存在するのかといった資産のより深い理解を促すとともに、特定の構成資産に観光客を集中させず分散させ、観光者が何度訪れても異なる観光体験を得られる観光地になると思われる。さらに、地域のブランド構築にも結びつけていくことが可能となる。構成資産という点的な観光資源よりも、構成資産を核とした面的な観光資源を複数設定し、観光者を広く回遊させることが、今後の世界遺産を観光資源とした観光地整備に必要であり、それと観光体験の設定およびそれに従った観光地整備の考え方および手順を明確にする必要がある。

なお、本研究で扱う「観光地整備」とは、施設整備等を中心としたハード面と情報提供やプログラムを中心としたソフト面から、「観光体験」とは観光活動とその対象から構成される。

2. 研究の目的

本研究では、世界文化遺産に登録されたことを契機に観光への取組みが始まった、周辺に観光資源が乏しい構成資産が面的に広がっている対象地を数か所取り上げ、現状の観光体験を把握した上で課題を明らかにし、課題と今までの観光地整備の関係を考察する。次いで、改めて構成資産が周辺地域との関係の中で見出されてきた価値を明らかにし、それらの関係が一体的に観光資源となりうるかを、観光体験の想定と共に検討し、その考え方および方法を構築することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究はその複数ある構成資産が面的に広がっている世界文化遺産であり、世界遺産登録によって観光地化した「白川郷・五箇山の合掌造り集落」「石見銀山遺跡とその文化的景観」「平泉-仏国土を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」「富岡製糸場」において、構成資産のどの部分が何と結びついて観光資源となり、そこでどのような観光体験が得られるのかを観光情報誌や観光案内から把握した。次いで、構成資産の価値(世界遺産としての価値以外も含む)を発揮できるような関連要素およびその現状を、文献調査および現地踏査より把握・整理し、新たな観光資源として検討した。その上で、新たな観光資源において想定される観光体験に基づく、新たな観光地としての整備のあり方を検討した。

4. 研究成果

(1)「白川郷・五箇山の合掌造り集落」

白川郷・五箇山は白山麓に位置し、かつては流刑人がいるなど陸の孤島であった。極めて狭い平坦地に集落があり、そのため都市化せずに合掌造りとそれを維持監視する住民の共同活動体である“結”が遺り、それが評価されて世界遺産に登録された。雪深い地域であって屋根に積もった雪を降ろしやすくすること、屋根裏で養蚕をしていたことから合掌造りが生み出された。また、周辺の山は急傾斜で木材を調達するというよりは、雪崩防止のためにブナを残しつつきており、それは雪持林として伐採されないでいる。

現在、菅沼・相倉・荻町集落を中心に、合掌造り民家を見る観光となっており、平均滞在時間は2時間と短い。また、村役場では新たに霊峰白山と組合せた観光を模索しているところであるが、白山までは車で30分以上かかる。神田家や和田家などでは民具の展示をしているが、本来の使用場所でない屋根裏に並べているに過ぎない。

上記、構成資産の合掌造り集落が成立した要因は、豪雪地帯の山深く極めて狭い平坦地に住み続けてきたことによる。住み続けるために山林と関係を有し、積もった雪を融かすために水路を設け、民具を工夫して使ってきた。そのため、集落付近のブナ林にトレイルを設けて集落と環境の結びつきを体感させ、使いやすさから民具を評価して民具を使ったプログラムの開発などが考えられる。

(2)「石見銀山遺跡とその文化的景観」

石見銀山遺跡は、銀山からの採掘によって栄えた大森と、採掘された銀を海外へ輸出した温泉津および鞆ヶ浦、それらを結び算出された銀を運んでいた銀山街道が遺っており、一体的に評価されて世界遺産に登録された。銀山街道沿いには宿場町があって、今も集落として遺っている。また、山城もおおくある。

現在、大森銀山および大森の町並みを中心に観光客が訪れている。鞆ヶ浦には宿が少なく、温泉津では大型温泉施設が倒産するなどしている。ガイドも大森を中心に行われており、大森から鞆ヶ浦まで案内できるガイドが少ない。大森では、古民家再生が行われて宿泊施設や店舗などに利用されており、移住者が増えてきている傾向にある。

大森および銀山街道沿いには、自生していると思われるツバキが多くある。ツバキは、銀の精錬に使用されており、ツバキを利用した産物開発が考えられる。また、間歩と大森の町の間はやや離れており、途中間延びした状況になっている。大森が位置している太田市では健康促進をうたったヘルスツーリズムに取り組んでいるが、そのコースには山城や銀山街道は含まれていない。銀山街道沿いには、先述したように西田など宿場町が遺されている。また、街道沿いには緩やかな棚田を見ることができ、銀山街道沿いにどのような景観が展開するか、といったシークエンス景観を把握することで、銀山街道の特徴に応じた区間区分が可能になる。

大森の伝統的建造物群や間歩においては、銀を採掘する様子やかつての暮らしといった無形の要素が分からない状況である。例えば、プロジェクションマッピングを用いて無形の情報を可視化させて来訪者で共有するといった取り組みも考えられる。

(3)「平泉-仏国土を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」

中国から伝わった仏教と日本古来の自然崇拜思想が融合した浄土思想が、空間および宗教儀礼や民族芸能に遺っており、それが評価されて世界遺産に登録された。今後、かつて平泉と物資の繋がりがあり、水田の地割が中世時代から変化していない骨寺村荘園遺跡などを拡張登録していく予定である。

中尊寺および毛越寺に代表される構成資産を中心に、観光ガイドが活動している。一部、VR(仮想現実)を用いた遺構の再現などが取り組まれている。

平泉およびその周辺地区においては、金鶏山を中心に都市が形成されており、その範囲は広く、金鶏山の可視領域にある山には神社が建立しているなど繋がりがあると思われる。金鶏山の可視領域から、金鶏山を中心とした一団の範囲を設定することも考えられる。また、中尊寺の子院前には棚田が広がっており、特徴的な景観を生み出している。また、今後骨寺村荘園は中尊寺経蔵別当の所領であった荘園であり、米を始めとする食糧のやり取りがあったことを踏まえ、骨寺村荘園でとれたお米を平泉でブランド化して消費するなどといった取り組みを行うことで、相互の繋がりを観光客に体感させることが考えられる。

また、浄土ヶ浜や松島など浄土に見立てられた他地域との比較から、平坦な土地に山や島があり、一部岸や川などで閉じた境界のある景観が浄土に見立てられた可能性があり、水田によって平坦地が担保されていることから、営農と平泉観光を結び付ける必要がある。

(4)「富岡製糸場と絹産業遺産群」

富岡製糸場が進めた蚕の優良品種の開発とその普及に重要な役割を果たした、近代の養蚕業関連文化財が評価されて世界遺産に登録された。富岡製糸場と、荒船風穴・田島弥平旧宅・高山社跡が構成資産となっている。

観光客は主に富岡製糸場を訪れるものの、生産ラインが稼働している様子は見られず、安全面からしばらくは西繭倉庫に入ることも出来ていなかった。世界遺産登録後、周辺は観光地化し、工場前の通りも一方通行とするなどしていたが、観光客は減少し、事業者が撤退して空き家となった店舗も見られる。場内では、社宅跡で近代化前の座繰り(繭から生糸を取り出す作業)実演

が行われている。また、西蔵倉庫の耐震補強工事が完了し、イベントスペースとして利用できる状態になっている。

瀧川近くの空いている屋敷用地（富岡製糸場建設地）を守るために街道が鉤型になっており、その角には屋敷を保護するための寺社が建設され、街道と敷地の関係が見出される。また、街道から一街区入った場所には歓楽街が古くからあり、富岡製糸場設置後は見学者などが利用していたと考えられる。現在も、置屋建築はいくつか現存している。一方、富岡製糸場に資材などを運ぶための駐車場が整備され、そこを起点とした街路（駐車場通り）に沿って明治37年には公園が整備されているのが確認された。このように、富岡製糸場はその敷地が町の骨格を形成し、建設されたことによって近世以降の歓楽街を維持し続けるとともに、駐車場および公園の整備という近代化をもたらしたといえ、周辺の町に大きな影響を及ぼしたといえる。

現状では、富岡製糸場と周辺地域とを結ぶ計画はなく、それぞれ独立した保存活用計画等の計画が策定されている。観光地整備を検討するに当たっては、来訪者の回遊行動を踏まえた検討が求められており、上記の史実を踏まえた新たな関係づくりが求められる。そのためには、例えば富岡製糸場を含んだゾーニングなどが必要となる。

一方、富岡製糸場内部では、生産ラインと自宅および工女寄宿所との関係が体験できるようになっておらず、工場内での人や物の動きが分かる状況になっていなかった。見学順路の設定および名づけによる、工場内外での人および物の動きの理解促進が期待される。

（5）世界遺産を活用する観光地整備

今のように土木技術が発達していなかった時代、人々は地形・地質・気候といった自然環境に即して生活せざるを得なかった。そのような生活の中で独自の生活様式や生業といった文化が成立していった。その文化の中で使われる道具や建築物、土地利用が規定されていった。時代を経て自然環境や文化が変化していく中で、遺されていった道具や建築物、土地利用が文化遺産と評価された（図1）。対象地でみてきたように、文化遺産として評価された道具や建築、土地利用だけが観光の対象となっており、観光客がその成立過程を体感できる状況にないといえる。したがって、観光地整備を検討するに当たっては、改めて文化遺産が成立した背景を紐解き、関係する諸要素を結びつけるような観光プログラムおよび動線を検討する必要がある。文化遺産だけを観光の対象とした場合、観光プログラムの可能性は限定的である一方、周辺環境など関連する諸要素と結びつける（図2）ことによって、観光プログラムの可能性は広がっていくと考えられる。

かつての大人数で移動するようなマスツーリズムではなく、現代のような情報社会においては、観光客は個々のニーズに基づいて観光している。さらに、その変化は以前よりも早いと考えられる。そういった多様かつ変化の早い嗜好性に対応させるためにも、特定の文化遺産だけでなく関連する諸要素との組合せからプログラムと観光の範囲を設定する必要がある。

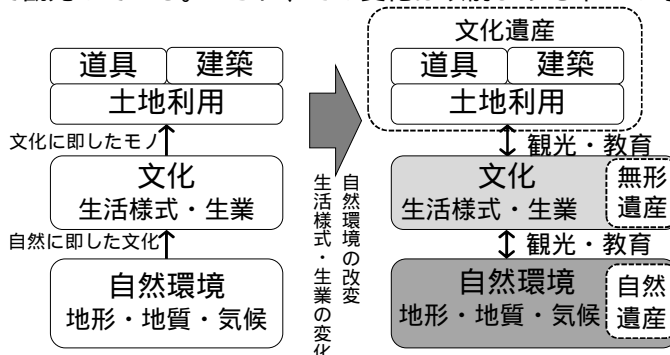


図1 文化遺産と観光

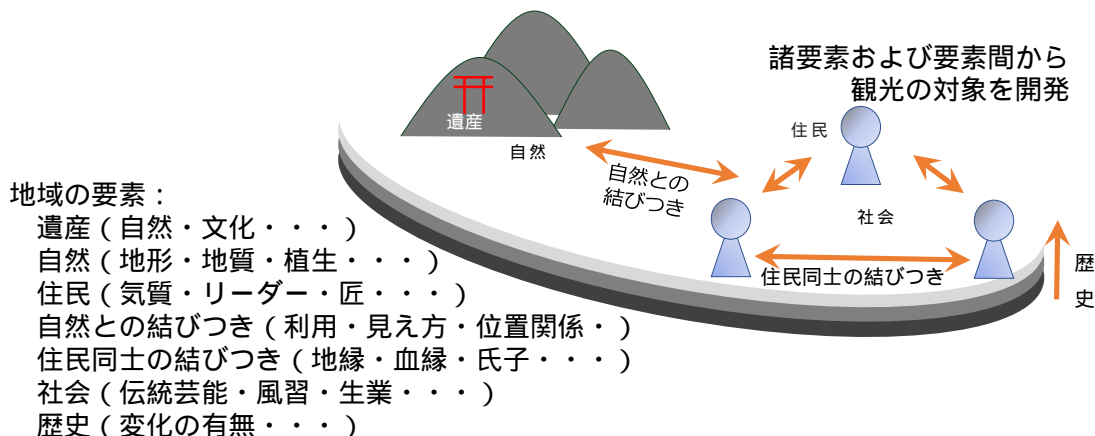


図2 観光対象の開発

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伊藤弘	4. 巻 48
2. 論文標題 近代以降の紀行文にみる平泉における訪問場所と景観の関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環境情報科学	6. 最初と最後の頁 64-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤弘	4. 巻 4
2. 論文標題 浄土景観の特徴と継承	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 風景計画研究	6. 最初と最後の頁 26-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤弘	4. 巻 721
2. 論文標題 世界遺産を活用した観光地整備	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 35-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 伊藤弘
2. 発表標題 風景計画とは
3. 学会等名 造園学会全国大会・ミニフォーラム
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本造園学会・風景計画研究推進委員会監修 / 古谷勝則・伊藤弘・高山範理・水内佑輔編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 164
3. 書名 実践 風景計画学 読み取り・目標像・実施管理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------